

三重先端がんフォーラム

平成24年 4月 7日(土)

会場 三重大学医学部 総合医学教育棟 臨床第2講義室

開会の挨拶： 登 勉 (三重大・医学部長)



第一部

座長 片山 直之、駒田 美弘 (三重大・医)、 小比賀 聡 (阪大・薬)



白血病モデルマウス：北村 俊雄 (東大医科研)



北村 俊雄 博士は、iPS細胞の樹立にも大きく貢献した独自のレトロウイルスベクター系により白血病関連遺伝子を強制発現して作製した白血病発症モデルマウスを提示し、C/EBP α やHes1を中心に、最新のデータに基づく白血病発症の分子機構を示された。見事に概念化された造血器腫瘍発生モデルは、がん化一般の理解にも通じると感じた聴衆も少なくなかった。最後にご自身が代表を務める新学術領域研究の芸術的イラストが紹介され、図らずしも研究はArtであることが再認識された。

MLL白血病と転写制御：横山 明彦 (京大・医)



横山 明彦 博士は、ヒストンメチル化を担うMLLが染色体相互転座によりキメラ遺伝子となることで、エピジェネティックな遺伝子制御に変化をきたし、白血病を引き起こすことを、独自に提唱・証明したMLL-AEP複合体モデルを中心に、エレガントに示された。臨床に由来する研究を純粋基礎研究にまで昇華させる第一級の研究スタイルは年齢のたいして変わらない若手研究者や医師に強い刺激を与えた。

新規 *in vivo* がん蛍光イメージング法：浦野 泰照 (東大・医)



浦野 泰照 博士は、蛍光プローブの分子の芳香環の電子密度を変化させ、発光を自在に時空制御することによってその有用性を高め、がんの早期発見だけでなく、外科手術の際の確実な除去をも可能にする独創的最先端研究を披露された。マウスを用いた実験では、蛍光プローブをふりかけるだけで、数分を待たずしてがん細胞が特異的に発光し、固唾をのんで見守っていた会場は一転、感動に包まれた。

第二部

座長 小川 朋子、緒方 正人、野阪 哲哉（三重大・医）



インテグリンとがん：島岡 要（三重大・医）



1年前までハーバード大でPIをされていた島岡 要 博士は、前半はスライドなしで、自分がなぜ、この場でがんに関する講演を行っているのか、を巧みなユーモアを交えた独特の話術で話され、会場を沸かせた後、後半はインテグリンの構造変化による活性化に関するモデル及びそれを阻害する化合物との構造活性相関についての世界の最先端研究を講演された。

WT1 ペプチドを用いたがんの免疫療法：杉山 治夫（阪大・医）



杉山 治夫 博士は現在NIHによる有望ながんワクチンランキングで世界1位に輝くWT1に関して、そのパイオニアとして、未発表データを含む最新のデータを提示された。WT1ペプチドによるがん免疫に関する多岐にわたる臨床試験の結果を中心に、がんのWT1免疫療法の研究成果の最前線に触れた会場は熱気と感動に包まれた。

EML4-ALK 肺がん遺伝子の発見と分子標的治療の実現：間野 博行 （自治医大、東大・医）



間野 博行 博士は従来、一部の肉腫以外の固形がんには存在しないとされていた、染色体変異によるキメラ遺伝子(EML4-ALK)が肺がん患者において初めて発見された経緯と実臨床における分子標的治療後の劇的回復例を紹介され、研究医の減少が危惧されている中、聴衆に強烈なインパクトと感銘を与えた。ALK-Lung Cancer Study Group (ALCAS) による全国診断ネットワークについても言及され、研究者による成果還元の一つの理想形が示された。

閉会の挨拶：川西 正祐（鈴鹿医療科学大・薬学部長）



情報交換会

